

研究紹介

「ニート・ひきこもり」についての社会心理学的考察：原因と対処方略について

3つのリスク要因

フリーター、ニート・ひきこもりと呼ばれる人を含め、日本の若者は約500万人いると言われている (Zielenziger, 2007)。

15歳から34歳の若い集団は「失われた世代」と一部の専門家から呼ばれている。もし本当にこれらの若い人々が「失われた世代」を象徴しているとするならば、その自己概念とそれまでの経験とはいったいどのようなものなのか。そしてそれは社会にうまく適応し、機能している人々のそれとは違うのだろうか。日本の社会においてうまく機能できないと思われる状態の基本となっている心理的帰結とは何なのか。ニートもしくはひきこもりになることに関係する要因とは何か。ニート・ひきこもりの区分は1つなのか、もしくは異なる種類があるのか。これらの疑問はいままでの調査や実験的アプローチからは明らかにされていない。そこでこの未来研究センターの内田由紀子助教との共同研究として、心理学的な比較調査や実験的手法を用いてこの問題を幅広く理解し、日本の若者を効果的に社会へ参加させるようにするための介入方法や政策の在り方を探求したいと考えている。

1つの調査から、3つのリスク要因が浮かび上がってきた。1つめは、機会や仕事のポジションにかかわらず、意識的に働かないことを選択しフリーターになる傾向を示す「フリーター生活の選択」。2つめは、「自己効力感の低下」(例：タスクを完

ビナイ・ノラサクンキット Vinai Norasakkunkit
(ミネソタ州立大学准教授・こころの未来研究センター連携研究員)

成させる能力がないと感じる、他人に携わらない)。そして3つめは「将来に対する不明瞭な目標」(例：将来何をしたいかについての不明瞭または非現実的な目標)であった。それらの3つのリスク要因は少なくとも3つの異なる種類のニート・ひきこもりを表している。

成功と失敗のフィードバック

私たちが行った実験では、あるむずかしい課題において成功(ポジティブ)と失敗(ネガティブ)のフィードバックを与えたのち、継続して同じ課題を行いたいという動機づけが高まるかどうかを検討した。結果は、ニート・ひきこもりになるリスクが高い生徒は、失敗のフィードバックを与えると課題を継続する動機づけは低くなり、逆に成功のフィードバックを与えると、タスクを継続する動機づけが強くなる特徴があることを示した。対照的に、ニート・ひきこもりになるリスクが標準的もしくは低い学生についてはまったく逆の結果が見られた。つまり、彼らは、成功のフィードバックを得るときと比べて、失敗のフィードバックを得たときのほうがむずかしい課題を継続的に行動動機づけが高くなることわかった。この傾向から、社会に適応している日本人は、とくに失敗に遭遇した際に、自己の改善をめざして努力しようとする動機づけをもって考えられる。なぜなら、日本の社会においては、状況やほかの人々の期待にあわせて行動することが社会でうまく機

能するために重要とされているからである。自身を改善するために、人々は自身のネガティブな情報に気をつけなければならないし、努力によって自分自身を改善できるくらい適応力が高いと信じなければならない。しかしリスクの高い傾向にある人々は、失敗の後にあきらめる傾向があった。おそらく努力によって自己を高めることができるという感覚(適応力や順応性)や、可塑性のある自己概念をもっていないと考えられる。興味深いことに、リスクの高い傾向をもつ人の動機づけは、同じように失敗よりも成功のフィードバックによりよい反応を示す北米人の傾向に似ていることがわかった。つまり、彼らは、北米人のように自己のよい部分に着目することなく、他人との協調性が低く、肯定的な自己概念をもつことができない状態にあると言えるかもしれない。

図1は、10年前に同様の手続きを用いて行われた比較文化研究(Heine et al, 2001)と今回の研究のデータを比べたものである。日本人と北米人の間の比較文化の傾向は日本人のリスクの低い学生とリスクの高い学生と類似している。さらに、協調性に対する態度を測ってみると、想像どおり、リスクの高い生徒は、リスクの低い生徒と比べて、協調性志向が低いことがわかった(図2)。

「外的な相互独立」と「内的な相互協調」のギャップ

もうひとつの調査において、ニート・ひきこもり尺度を使った質問紙

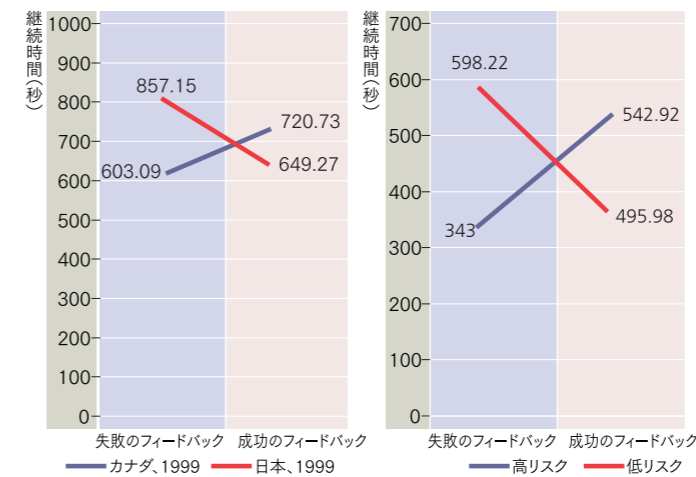


図1 失敗のフィードバックと成功のフィードバック比較文化研究(左)と今回の研究データ(右)

調査の段階で、われわれは関西地区にある若者支援センターからニート・ひきこもり状態にある(もしくはあった)人々の参加を募った。比較群として、京都大学の学生にも回答してもらった。その質問紙にはニート・ひきこもり尺度、相互独立的と相互協調的に対する順応尺度、どれだけ変化に対する適応能力があるかの認識を測る尺度、親子関係や親がどれだけ子どもを受け入れているかに関連する尺度、相互独立、相互協調に対する潜在的な態度を測る尺度が含まれていた。予想どおり、ニート・ひきこもりの人々は大学生に比べて、より適応能力が低いという自己認識を持っており、さらには自分の性格は変わりにくいという視点をもっていた(図3)。

これは先に説明した研究の結果と同様に、ニート・ひきこもりの人々は一度失敗を経験すると、課題の継続を放棄したくなるという感覚があることを示唆している。言い換えると、失敗の経験は平均的な日本人の自己概念においては動機づけの要因となる傾向がある一方で、ニート・ひきこもりの人々においては動機づけを低める要因となるといえる。実際、学校や職場での失敗の経験がニート・ひきこもり行動の大きなきっかけとなっていると考えられる。

また、フリーター生活の選択とい

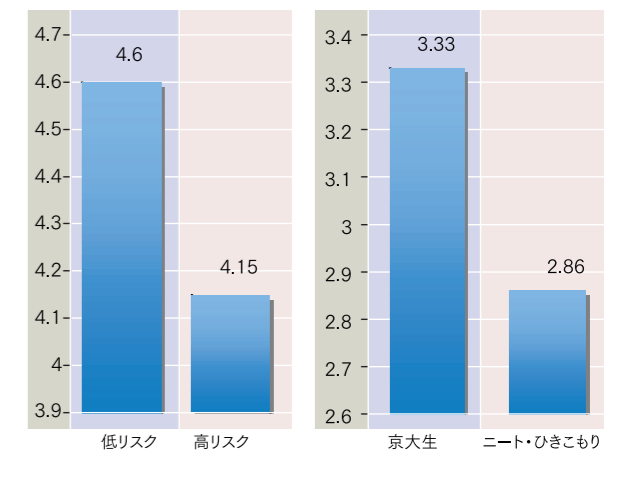


図2 相互協調の平均値

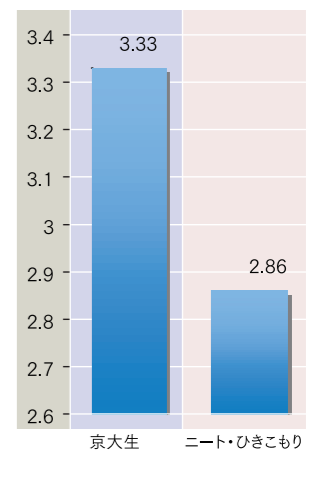


図3 適応能力に対する自己意識の平均値

うリスク要因1をもつ人々はほかの2つのリスク要因を持つ人々より心理的なストレスは少なく、社会的な機能も高いが、どうやら彼ら自身の中に矛盾を抱えているようで、質問紙上で自分の態度についての回答と、潜在的態度を測る尺度での回答の間でギャップを持つことが示された。とくにフリータータイプのニート・ひきこもりは、自分は相互独立的な志向を持っていると回答する傾向があるが、潜在的なレベルでは彼らは比較的相互協調的な志向を持っていた。したがって、彼らの中に存在する「外的な相互独立(自分は独立しているべきだ)」と「内的な相互協調(本当は人とつながっていたい)」のギャップがリスクの要因1と関係があると考えられる。要因2と3を持つニート・ひきこもりは若者支援センターで集められた元ひきこもり、もしくはいまにもひきこもりになりそうな若者が多かったことから、おそらく機能面においてなんらかの問題をかかえているタイプと言える。一度失敗した課題の継続に対する動機づけが低いという感覚を頑なに持っていることに加えて、彼らの自尊心は低かった。分析からは、このような自尊心の低下は両親から認められていないという感覚、そして学校でよい成績をとると両親の目標を満足させられていないとい

う感覚とつながっていた。

今回の調査から

今回の調査から、①ニート・ひきこもりは1つのカテゴリーではなく、ニート・ひきこもりの中にも少なくとも3つのタイプがあること、②ニート・ひきこもり、またはそのリスクのある人々は一度失敗を経験すると、課題の継続が困難になるという自己感覚をもっていること、③両親に認められているという感覚と両親の期待に込んでいるという感覚が低いことが自己効力感と自尊心の低下をもたらしており、また、将来の目標に対する非現実的な期待と動機づけの低さがニート・ひきこもりを生み出すリスクの要因として重要なポイントとなっていることが明らかにされたと言えよう。

References

- Heine, S. J., Kitayama, S., Lehman, D. R., Takata, T., Ide, E., Leung, C., & Matsumoto, H. (2001). Divergent consequences of success and failure in Japan and North America. An investigation of self-improving motivations and malleable selves. *Journal of Personality and Social Psychology, 81*, 599-615.
- Zielenziger, M. (2007, April). *Japan's Lost Generation*. Lecture at World Affairs Council of the Monterey Bay, Monterey, California.

(翻訳：内田由紀子、矢野裕理)